

# こんなことをやっています

福井農林高校

## 演習林実習を通して学ぶもの

福井農林高校

釵内倫夫

大野市南六呂師にある奥越高原青少年自然の家から出発し、六呂師スキー場を左手に見ながら百段ほどある階段を登りきるとスキー場の最上段にたどり着く。すると眼下にはハイランドホテルやソフトクリーム工房、右手を見ると鮮やかな朱色をした牧場の牛舎やサイロが牧草の濃いグリーンとのコントラストを描き、何とも言えないすがすがしい気分になされる。

福井農林高校演習林体験実習はこの山歩きから始まる。さらに歩みを本校の演習林であるスギ林へと進めると、年に何回かは森林組合の方々が間伐をしている現場に出くわすことがある。ここで足を止め、アリの隊列のように歩いてきた最後尾が到着するまで、一五分ばかり待つ。

ようやく後ろの女子生徒の楽しい声近づいてきた。もう後ろに誰もいないか確認した後、できるだけスギの木の下に生徒たちが入るように声をかけ、そして、みんなに「ちよつと静かにしてみようか」と声をかける。すると不思議と風の音、鳥の声なんか聞こえてくる。そこで次に「このスギの木の上の方を見上げてみよう」と生徒たちを促す。ここであらかじめ用意しておいた決め台詞をいう。「この地球上で最も大きくなり、最も長生きな生き物は何だと思う?」「木」という声が続々と返ってくる。この時、私は何とも言えず「やったー」という気持ちにさせられる。まあ、ただの自己満足ではあるのだが、実は先ほどの「地球上で…」という言葉は「宇宙船地球号」というテ

レビ番組の中で故・緒方拳氏が世界遺産の熊野古道を歩きながら、その圧倒的なスケールに魅了され、樹齢二千年程のスギの樹木を見上げつぶやく言葉なのだ。ただの受け売りなのだが、このシーンを見てから私の林業教育に対する思いはさらに深まったと言っても過言ではない。

少々前置きが長くなったが、本校の演習林は大正三年に旧平泉寺村との間で契約がかわされて以来、現在の環境工学科の前身となる林業緑地科、林業科の多くの先輩方の思い出の実習林として使用されてきた。昭和六二年からは林業緑地科の生徒のみならず、全学科にて実習を行うこととなり、山林実習以外にホーム研修の内容も取り入れて現在まで行っている。生徒たちは

三年間で必ず一度は演習林実習を体験することになる。環境工学科に入学した生徒は三年間、つまり毎年林に足を踏み入れる



ことになる。全国的に見て、東北や長野、岐阜の山林地帯の農業高校で学校林を有する所はさほど珍しくはないが、北陸地方では唯一、全国的に見ても総面積一三〇ha（東京ドーム約二八個分）をほこる面積はまれである。

私は二年前の転勤に伴い、この演習林を担当することになったのだが、転勤が決まった頃から林業教育に対する不安と、県内でただ一つの林業教育のコースを展開していくというプレッシャー、それになんと言ってもこれほどのスケールを持った演習林。「いつたいこれからどう教えていけばいいだろう」と頭を悩ませていた。そんなことを毎日考えていても四月になり、新任式を終え、初めての授業を迎えると、当時の環境工学科の緑化コースの三年生が持ち前の明るさで挨拶してくれた。「先生が新しい緑化の先生ですか?」と。前任の緑化担当の先生の穴埋めが少しでもできるようにと、春休み中に予習はしてきたつもりであったが、一〇年間林業教育から離れたいたこともあり情けない授業であったと思う。しかしあつという間の五月に担任

しているクラス  
の生徒を引率  
し、演習林に二  
泊三日の測量実  
習に出かけた。



久しぶりに本校の演習林を目にし（私は本校林業緑地科の卒業生なので）、高校時代の思いと、現在の置かれている立場を再確認しような思いになった。そしてゆつくりとスギの巨木を見上げたとき、以前見た緒方拳の名ゼリフを思い出した。どうせ毎年ここに来るのなら、このストリートな気持ちを生徒に少しでも伝えたいと思っていた。

そして現在私は、毎年三回多い年は四回この勝山市平泉寺地区に足を踏み入れ、山や木について語り、ノコギリを初めて持つ生徒達に、温暖化でCO<sub>2</sub>を吸収する樹木をなぜ間伐しなければならぬか、森林は生態系でなぜ必要なのかと話している。

最後に本校の環境工学科の教員は皆、

県産のスギ間伐材を薄くスライスした板を名刺として使っている。実はこれ、本年度行われた全国植樹祭の時に本校卒の県職員の方から頂いたもののだが、企業訪問やインターンシップの際に「福井農林高校です。よろしくお願いします」と差し出すと、何ともインパクト大なのである。そして話題が木の話や環境問題のことにふくらんだりする。またそれと同時に、県内唯一演習林を有しているという誇らしい気持ちにさせてくれる。福井農林高校で学ぶからには、農業高校ならではの自然に目を向け、演習林を通し、日本特有の春の桜、目に美しい新緑、心を和ませる紅葉、気持ちを引き締めすつぱりと街を銀色の世界に染めてくれる雪、そんな四季の移ろいを味わえる日本人に育つて欲しいと切に願う。



## 初担任一年目を終えるにあたって

福井農林高校

時 田 篤

私の勤務する福井農林高校では、一年が四クラスあり、それぞれのクラスが学科制になっている。学科制であるためクラス替えはなく、入学したそのままのメンバーで三年間を過ごすことになる。このような学校で、私はかつてからの夢であった一年生のクラス担任をさせてもらうことが出来た。初めての担任、一年生の教室で私を見上げる「七六の瞳」に、緊張で挨拶が早口になってしまったのを思い出す。

ひとつの集団で、三年間を過ごすことは、団結という大きな力を生み出すことに繋がる。体育祭や文化祭での三年生の様子を見ると、その姿勢にこちらが胸を熱くするほどだ。しかし裏を返せば、何があっても三年間という長い時間を、

同じ人間関係のなかで過ごさなければいけないとも言える。ひとりひとりに自分の居場所があり、安心してクラスに居ることが出来る。そんな環境を作りたいという想いから、今年度、私は教室の環境づくりに力を入れた。

まずは、「整理整頓・清掃の徹底」を行った。黒板や床を舐められるくらいキレイに！と言うと大げさかも知れないが、床にゴミや私物が散乱しているような教室では、ひとりひとりが安心できない教室とはいえないのではないのかと思います。

